

自然との知恵くらげ

志摩の民具

志

―農業・漁業・養蚕―

特別展『志摩の民具^{いにしえ}①—農業・漁業・養蚕—』 の開催にあたって

日本は古^{いにしえ}より、『家』や『ムラ』ごとに生産し、集い、分かち合い次の世代へと文化を継承してきました。しかし、明治維新後の西洋化、二度の世界大戦、高度経済成長期を経て、機械化や社会構造の変化にともない行動単位は『個人』へと変わってきました。

このことは、精神的には助け合いの意識や郷土に対する執着意識をも減少させ、物質的には機能性を追求するようになりました。そして、先人達の生活の知恵が形になった民具はみんなの記憶から消えようとしている今、使うモノから残してゆくモノへと変わってきました。

今回の特別展では、郷土の生業の道具の中から『農業・漁業・養蚕』をテーマに、古代の道具も紹介いたします。

この特別展で、自然と先人達の知恵くらべで今に至った郷土の生活文化の片鱗でも感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、この特別展開催に当たりご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

平成12年10月31日
志摩町歴史資料館

農業

稲作の知恵

干拓

弥生時代より米づくりを生業としてきた志摩。

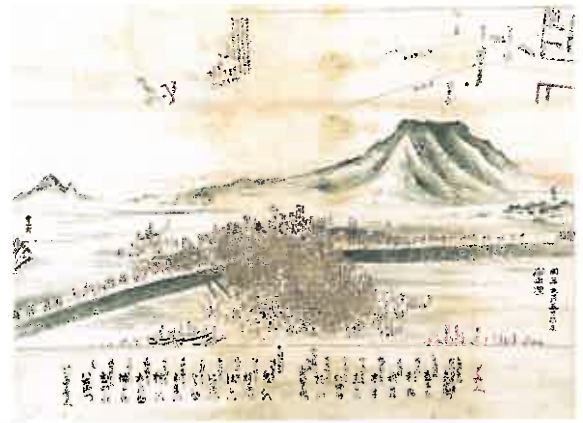
時は移り、米はいつしか租税対象となり、江戸時代になると賃金や諸々の価値を米の量で換算するようになりました。そこで、狭い平野しか持たなかった志摩の人々は少しでも多くの米を得ようと、海を埋め立てました。

志摩での最初の干拓は、16世紀に現在の役場付近で行われ、その名残は現前原市作出の集落に見ることができます。

江戸時代になると、幾度となく干拓工事が行われそれらは今でも字名の「元禄開」、「四丁開」、「宝暦開」、「嘉永開」として残っており、当時の場所をうかがい知ることができます。

寺山地区でも嘉永年間に干拓工事が行われ、その時の「潮止め（引き潮を見計らって、石垣を築き一気に土砂を運ぶ作業）」には約4千人が携わったと記録に残っています。

先人達の知恵と努力があったからこそ、現在の美しい田園風景があるのです。



干拓工事絵図



江戸時代の干拓跡

田すき・荒おこし

田植え前の水田の土を掘り起こします。

牛馬鞍（ぎゅうばぐら）

牛や馬の背に掛けて荷物を運搬したり、田を起こす犁などを牽引するのに使われています。

単用二段犁（たんようにだんすき）

二段耕犁は、短床犁の前に小さな副犁をとりつけています。田畑を上下二段の犁で同時に土を薄く細かくすき起こすので、後の碎土作業が容易になります。

カルチペータ

田畑を耕し、除草やいも類の堀取りなど万能耕作機として使われています。



牛馬鞍



単用二段犁



カルチペータ

民具の世界



代かき（昭和初期）



ぶり棒での作業風景



草履作り



菰桁と菰脚を使って炭俵作り



福岡県立糸島農業高等学校の牛馬耕風景（昭和5年）



福岡県立糸島農業高等学校の田の草押し風景（昭和23年）



千歯扱きでの作業風景



蓑・笠姿で雨で流れた稲を拾っている（昭和34年）



志摩町歴史資料館